

## 論文

## 存在表現「ある」「いる」の意味

## —事態解釈の観点から—

山 本 雅 子

## 要 旨

本研究は、言語主体にとってことばが意味を持つというのはどういうことかという観点からの言語研究である。文脈に基づく意味解釈によって動的な意味様相を呈する、日本語の存在表現「ある」「いる」の意味を、言語主体の如何なる認識の差異が反映されているか、という主体の事態解釈の観点から考察した。事態解釈の観点からとらえた「ある」「いる」の意味は次のようにいえる。両者はともに言語主体の〈主観的〉な存在認識態度を反映するものであり、「ある」「いる」の別は、主観的事態解釈の際に〈主体的動性〉スキーマが作用するか否かに依拠するものである。これらは、存在詞の研究と言えは存在の対象についての研究であることが当然とされる従来の研究では見えなかった意味特質である。

キーワード：言語主体，知覚，パースペクティヴ，スキーマ，動性

## 1. 問題の在処

日本語の存在表現「ある」「いる」の振る舞いが特徴的なものであることは、他言語の存在表現と比較してみると浮き彫りとなる。例えば、英語との対照は次のような違いの見えを提示する。

- (a) 机の上に本がある。

(b) 机の上に猫がいる。

(a)' There is a book on the desk.

(b)' There is a cat on the desk.

日本語では (a)(b) にあるように、「ある」「いる」で表される存在表現が、英語では (a)' (b)'にあるように同一の表現である 'there is' で表される。また、日本語と文法的に多くの点で似たところをもつ韓国語でも、「(本が) ある」も「(猫が) いる」も 'issta' という同一の表現で表される。

このような「ある」「いる」の差異は、「存在」の対象が無生物（無情のもの）か生物（有情のもの）かに拠って決定されると説明されるのが従来である。寺村（1982）では、「ある」「いる」のはたらきの分類と、対象の別との関係が〈人、動物〉と〈それ以外〉として記されている。まとめると以下のようである。

①出来事の発生

述語：アル，起こる，発生する

例：キノウ，地震ガアッタ

②物理的存在（あるとき，あるものがある空間を占めて存在する）

述語：アル，ナイ，イル，多イ，少ナイ

（注）対象が人，動物であれば述語はイル，イナイ，それ以外であれば述語はアル，ナイ

例：アソコニ魚屋ガアル

アソコニ魚屋サンガイル

③所有，所属的存在

述語：アル，イル，多イ，少ナイ

（注）対象が人，動物であっても，アルの方がイルよりよく使われる

例：彼女ニ子ドモガアルトハ知ラナカッタ

④部分集合，または種類の存在

述語：アル，イル，多イ，少ナイ

例：居眠リヲシテイル議員ガ半分以上アッタ

（寺村 1982：155-161）

上記の分類説明には次のような問題がある。まず①についていえば、たしかに「出来事」の場合に「いる」が用いられることはなく、述語に「ある」のみが挙げられていることは納

## 存在表現「ある」「いる」の意味

得がいく。しかし、「ある」「いる」の意味として②③④すべてが「存在」にかかわる説明であるのにたいし、①のみは「発生」という用語での説明となっている。「存在」と「発生」とではアスペクトの意味を筆頭にさまざまな点で意味的質のちがいがあある。また、①-④のうち、「ある」「いる」の使い分けが生じるのは②③の場合に限られ、「いる」の存在対象は〈人、動物〉、「ある」は〈それ以外〉であると説明されている。しかし、このような対象の別と「ある」「いる」表現との連関についての説明は、われわれの日常の実際の使用例<sup>1)</sup>に照らしてみると合致しない例も多く、説明力があるとはとても言い難い。また、④については「ある」「いる」どちらも用いられるとなっているが、実例の観察からは両者の使い分けは自在ではなく、なんらかの制限があるように思われる。これらそれぞれの実際を順に見ていこう。まず、②「物理的存在」についてみる。

- (1) 垂れ下がる下枝や、足にからむ蔓を、帯剣で切り払いながら、私は進んだ。湿った下草を踏む軍靴は、滑り易かった。方向を失わないため、河原からの明るい反射が、羊歯類をエメラルドに光らす距離を、林縁と保った。そこにも道があった。辿って林の奥に進むと一件の小屋があり、人がいた。一人の比島人が眼を見開いて立っていた。(『野火』：17)

(1)では〈人〉が「いる」、小屋が「ある」とあり、②「対象が人、動物であれば述語はイル、イナイ、それ以外であれば述語はアル、ナイ」に合致する。しかしながら、〈人〉という「物理的存在」が「ある」でも表され得ることを(2)は示している。〈家も人〉も「ない」で表されているが、「ない」は「ある」の否定形であることから、(2)は〈人〉という「物理的存在」が「ある」でも表されることを示す例といえる。

- (2) 私の眼は素早くその野を検討していた。眼につく家も人もなかったが、橋は既に人家が近い証拠であった。(『野火』：69)

さらに、〈人〉の存在が「ある」でも「いる」でも表されることを示す例として(3)は興味深い。「変死者」も「身元の分からない人」も「不幸な死に方をする人」もすべて〈人〉を指示しているにもかかわらず、それぞれ「ある」「いる」「ある」で表されている。

- (3) 「すると、この三県では、それ以来、いままで、変死者は一人もなかったのですな？」「身元の分からない人はいません。家族にひきとられて、はっきりした法律上の処置のすんだのは別です。本県でも、自殺が三件傷害死が一件、福井県では焼死が一件、自殺一件、富山県では自殺二件です。なるほど、こうしてみると、わずかな期間に、不幸な死に方をする人が

ずいぶんあるもんですね。」警部補は、メモを見て、感嘆したように告げた。

(『ゼロ焦点』：66)

他方、〈人、動物以外〉の「物理的存在」が「いる」で表されることもある<sup>2)</sup>。(4)は無生物である「列車」の存在が「いる」で表されている例である。

- (4) 東京駅では、《あさかぜ》に乗る佐山とお時の姿を見た者があった。たしか、目撃者は十三番ホームに立って、十五番線の発車ホームを見たということだった。しかし、東京駅では、その間に十三番、十四番のホームがはさまっている。列車の発着の頻繁な東京駅のホームが、間に汽車の邪魔なしに、十三番から十五番にいる列車がそのように見通せるものだろうか。

(『点と線』：95)

次に、③「所有、所属的存在」について見てみよう。ここでは「Xが人、動物であっても、アルの方がイルよりよく使われる」とされている。確かに昔話の冒頭文では(5)に見られるように「ある」が用いられることがある。

- (5) むかし、むかし、おじいさんとおばあさんがありました。

しかし、日常の会話となると、「所有、所属的存在」を意味する場合も(6)が示すように「いる」の方が極めて自然な印象を与える。

- (6) 最初に口を開いたのは緑だった。彼女は僕の手をそっととった。そしてなんだか言いにくそうに自分にはつきあっている人がいるのだと言った。それはなんとなくわかってると僕は言った。

「あなたには好きな女の子いるの?」「いるよ」「でも日曜日はいつも暇なのね?」「とても複雑なんだ」と僕は言った。

(『ノルウェイの森』：164)

最後に、④「部分集合、または種類の存在」について見よう。注で説明がないことから「部分集合、または種類の存在」では、対象が何であれ、「ある」「いる」ともに使用されることを意味しているとみなされる。(7)は「種類の存在」が「ある」で表されている例である。しかし、会話での表現となると、(6)の場合と同様、〈人〉の場合は「いる」が極めて自然な印象を与えることを(8)は示している。

## 存在表現「ある」「いる」の意味

(7) けれども幸いにして人類はかくの如き稟資の人ばかりからは成り立っていない。そこにはもっと愛の純真な表現を可能ならしめようとする人がある。そうしないではいられない人がある。  
(『惜しみなく愛は奪う』：105)

(8) 「とても静かですね」と僕は言った。「今の時間は誰もいないのよ」とレイコさんは言った。「私はとくべつ扱いだから今こうして自由にしているけれど、普通の人はみんなそれぞれのカリキュラムに従って行動してるの。運動している人もいるし、庭の手入れをしている人もいるし、グループで療法している人もいるし、外に出て山菜を集めている人たちもいるし。そういうのは自分で決めてカリキュラム作るわけ。(略)」  
(『ノルウェイの森』：209)

以上、これまでの観察からは、「ある」「いる」には、たしかに寺村の分類にあるような振る舞いがあることが検証されるが、それと同時に、この分類では説明できない振る舞いも多々存在し、実際の振る舞いが如何に柔軟であるかが明らかになったといえよう。従来では、「言語研究者は〈言語そのもの〉だけを睨んでいればよいわけであり、現実には〈言語の在り方〉に関わっていることは否めなくとも、例えば場面とか、話す主体と言った〈非言語的〉な要因は排除したカタチで考察がなされてもそれは正当である」(池上 2000：86)として、言語表現を自律したものとして捉え、個々の言語表現間の関係を後付的に説明するのが言語研究の姿勢として当然視されてきている。

しかし、「ある」「いる」の意味は、うへの観察から分かるように、柔軟な文脈に基づく意味解釈によって成立し、動的な意味様相を呈している。このような多様な様相を呈する「ある」「いる」の意味を解明するためには、従来のスタティックな研究姿勢から離れ、柔軟な情報処理、創造的な情報処理を可能とする当該の形式と意味が、その背後にある如何なる要因によって動機づけられているのか、というダイナミックな観点からのアプローチが必要とされる。言葉が、「[人間心のメカニズムに密接にかかわって]おり、[言葉の意味は、外部世界に客観的に存在しているのではなく、われわれの具体的な経験を基盤とする認知のインターフェイスを介して理解され動機づけられている。言語主体としての人間は、外部世界との相互作用を通して、具体的な経験を意味づけている。]」(山梨 2005：3)ことは、近年のめざましい進展を遂げている認知言語学の分野では、多くの研究成果が証明しているところである。

本論においては、「ある」「いる」の意味を、言語主体のどのような認識態度に動機づけられているかといった動機づけの観点から説明する。すなわち、言語主体とは関わりなくなにかしらの対象の存在を表示するとされてきた言語形式「ある」「いる」の意味機能を、言語主体の事態把握態度の観点から説明しようとするものである。まず、第二章では、「ある」「いる」が表す「存在」が言語主体による主観的な事態把握であることを説明する。続く第三章

では、「ある」「いる」が反映する事態把握態度の差異が、主体の認識態度の如何様な差異であるかを説明する。

## 2. 主観的存在認識

対象の存在を認識し、その認識態度を表現化するという言語行為は、言語主体の知覚およびパースペクティブを根拠としての認識行為を反映するものであり、〈主観的〉な行為である。

### 2.1 知覚

言語主体が対象を、自己のいま、ここ、に存在する物理的存在としてその存在を認識する態度を表す「ある」「いる」の振る舞いを観察すると、両者ともに、その存在認識に言語主体の〈知覚〉が作用していることが分かる。その実際を見てみよう。

**視覚** (9)の「ありますよ！」は、プリントした写真のなかに、既に認識している顔と同一の顔の存在を認識した時の西本の発話である。話者の〈視覚〉に依拠した存在認識を「あり」が反映している。

(9) 「ちょっと待て。あのビデオをもう一度見てみよう」と、十津川は、いった。富士の裾野の、陸上自衛隊の演習場で、撮ったビデオである。それをもう一度、テレビにかけてみた。最初に、五、六人の人間が映し出されてくる。それを止めて、拡大してみた。一人一人の顔が大きくなって、かなり、顔立ちがはっきりしてくる。それを一人ずつ、プリントした。次に、十津川は、中央新聞の友人に電話して、立川代議士の写真を、送ってもらうことにした。それと、メディアXの社長の写真である。まず、立川代議士の写真が送られてきた。その顔写真を、ビデオからプリントした写真と比べていく。「ありますよ！」と、西本が声をあげた。プリントした六人の顔写真の中に、立川代議士と、同じ顔が、あったのだ。

(『十津川警部』：171)

また、(10)の「見え」「ある」では、空間のなかを能動的に移動する主体が外部世界を理解する知覚プロセスをアイコン的<sup>3)</sup>に表している。主体の移動は環境の見えを順次変化させ、変化する見えに伴って現れ出る物体は、主体にその存在の認識を強要する。言いかえれば、対象が客観的にそこに存在しているのではなく、主体が対象に遭遇するのである。「道を歩いている」主体はまず「坐潮楼の屋根」の存在を認識させられ、次いで右手に視線を投じることにより現れ出た「倉庫」の存在を認識させられるのである。主体が「倉庫」の存在を認識

## 存在表現「ある」「いる」の意味

する態度を「ある」が反映している。(9)(10)は、(9)では主体も対象も静止しており、(10)では主体が移動しているという差異があるものの、両者とも〈視覚〉に依拠した存在認識であるという点で共通している。

(10) 道を歩いていると、左手にその坐潮樓の屋根が見え、右手に見覚えのある倉庫がある。

(『張り込み』：349)

**聴覚** (11)は電話を通しての会話である。本田がひょっとして殺されているのではないかと心配していた矢木にとって、電話から聞こえる本田の声を認識することは、メトニミー的に本田の存在を認識することでもある。〈聴覚〉に依拠した存在認識を「いる」が反映している。

(11) 矢木は心配していたらしく、いきなり「何処で、何をしているんだ？」ときいた。「今、伊豆半島の東海岸を南下中です。」と、本田はいった。「何でそんなところにいるんだ？」と、矢木がきいた。

(『十津川警部』：125)

**嗅覚** (12)では、〈嗅覚〉のはたらきを表す「嗅いでみましたが」という表現を指標にして「妙な匂い」の存在が否定されている。〈嗅覚〉に依拠する存在認識の態度が「ありません」に反映されている。

(12) 息を嗅いでみましたが、妙な匂いはまったくありません。喉にも舌にも変化はありません。食中毒の症状でないことは一目で判断できました。

(『海辺のカフカ』：55)

**触覚** (13)には、「風」を対象とした存在表現が、「風」―「ある」/「風」―「ない」/「風」―「あれば」/「風」―「ありません」の四種類のコンビネーションとなって表されている。このうち、最初の「風」―「ある」と最後の「風」―「ありませんよ」が〈触覚〉を根拠とした存在認識を表している。とりわけ、「ありませんよ」では、発話の前の「自分の人さし指をペロリと嘗め、蠟燭を立てて見せた」という説明文が、〈触覚〉を根拠とした存在認識であることを明示している。これにたいし、それ以前の「ない」は、洗濯物が乾いていないという〈視覚〉を根拠とした存在認識であり、また、「あれば」は可能世界での存在物という観念としての「風」の存在認識となっている。この例は、根拠となる知覚の種類は、対象によって決定されるのではなく、あくまでも対象の存在を認識する主体の側からののはたらきかけであることを示す好例である。



- (13) 指先に挟んだ煙草が落ちたのは、そのときである。風かな、と思った。ふっと風にもってゆかれた、そんな感じだった。「風があるのかな」宅次は呟いた。「風なんかないでしょ。風があれば、洗濯もの、乾いていますよ」厚子は縁側に出てくると、自分の人さし指をペロリと舐め、蠟燭を立てて見せた。「風なんかありませんよ」 (『思い出トラップ』: 11)

〔味覚〕 (14)が示すように、〈味覚〉に拠る存在認識の対象は「旨み」「コク」いった非物理的存在であるが、「粘り気」「歯ごたえ」というような〈触覚〉のメタファーとして表現されることが多い。

〈触覚〉によって、主体のいま、ここでの存在が認識される対象は物理的存在にかぎられており、このことから、〈味覚〉では実際の対象は抽象的概念でありながら、主体がその抽象的概念をあたかも物理的存在のようにして認識していることが窺われる。

- (14) 中国では粘り気がなく、さらりとした米が好まれる。/玄米は炊いたご飯も歯ごたえがあるが、炒飯にしてもかなり歯ごたえが残る。/ぱらりとしながらも適度な粘りと旨味がある。/独特のコクがある。 (『サライ』: 99-101)

## 2.2 遠隔パースペクティヴ

言語主体は、対象を自己のいま、ここに存在しているとみなさない場合には、自己のいま、ここを起点として投じたパースペクティヴの到達点である遠隔に存在するものとして認識する。起点での対象は「過去領域」「記憶領域」「思考領域」「予期スキーマ領域」という5つの領域での存在として認識される。また、このような遠隔対象を認識する際の主体の認識態度にはふたとおりある。一つは、自己のいま、ここに立脚して遠隔の対象を認識する場合であり、この場合は「あった」「いた」のように言語形式がタ形で表される。もう一つは、主体の実際は自己のいま、ここに立脚していながらも心的位置を遠隔領域にシフトし、その領域のなかで対象の存在を認識するというものである。この場合は、主体は心的にはシフトした領域のいま、ここ、から対象の存在を認識することになることから、2.1の場合と同様に言語形式は「ある」「いる」というル形で表されることになる。これらの実際を見てみよう。

〔過去領域〕 (15)では、「余裕」という非物理的存在の非存在を認識する態度が「ありませんでした」に反映されている。発話時点以前の七ヶ月間の「余裕」の非存在という過去の事実を主体が発話時点で認識していることをタ形が反映している。過去領域での存在認識の場合は、言語形式はタ形に限られる。



## 存在表現「ある」「いる」の意味

- (15) このような落ち着いた気持ちで手紙を書くのは久しぶりです。あなたにはじめて博多でお目にかかったのは今年の一月でした。香椎の海岸で、玄界灘の吹きさらしの風にふるえながら、あなたのお話を聞いてから、七ヶ月経ちます。経ってみると早いものですが、捜査に心を追われて一日としてしずかにやすむ余裕がありませんでした。今日は、初秋の陽ざしのように心がおだやかです。事件が終わったせいでしょう。(『点と線』：226)

**記憶領域** (16)にある、かつて〈視覚〉に拠って認識した「指紋」の非存在は、発話時点においては記憶のなかにある非存在であり、主体にとっては心的遠隔に位置する対象である。対象の非存在を認識する態度を「ありません」が反映し、対象を主体のいま、ここからは遠隔に位置するものとして認識する態度を「でした」のタ形が反映している。

- (16) 「それはわかりませんが、そのナイフが本当に原口を刺したものなのでしょうか？ 他にナイフは見つかっていないんでしょうか？」「今のところ、見つかっていないということです。それから、ナイフに付着していた血は、原口と同じO型です。ああ、もう一つ。柄の部分に、指紋はありませんでした。」「手袋をしていたとすれば、指紋はつかないでしょう？」(『十津川警部』：27)

一方、(17)「この下にいる」と発話した男にとって「十津川警部と亀井刑事」の存在は、発話以前に〈視覚〉に拠って認識した存在であり、発話時点では自己の記憶のなかの存在であるため(16)同様タ形で表わされるはずのものである。しかし、言語主体は、自己の記憶のなかに自己の心的位置をシフトさせ、記憶世界のなかで「十津川警部と亀井刑事」の存在を認識している。そのパースペクティヴシフトを「いる」というル形が反映している。

- (17) 「もう一度きくぞ。今度返事をしなければ、この引き金を引く。十津川警部と亀井刑事は、何処だ？」「この下にいる」と、男が、いった。(『十津川警部』：256)

### 思考領域

- (18) 十字架は恐らく林の向うの、海に臨んだ村の会堂の頂を飾るものであろう。会堂は比島の村で常に一番高い建物である。それではあの下にやはり家があり、人がいる。(『野火』：57)

(18)は、作中人物「私」が海岸の林の上に十字架を見つけた時のことを描いた文章である。これら三つの文は、最初の二つの文が条件となり、その帰結が三つ目の文となるという構成

となっている。帰結の内容は「私」の考えたことであり、思考内容内存在の「家」と「人」の存在認識が「ある」「いる」に反映されている。

**予期スキーマ領域** (19)では携帯電話の存在を確信する真美が、ベルの音を手がかりに探索し、携帯電話を見つけるという一連の出来事が描写されている。見つけるという行為は探索という行動を経て対象の存在を認識する行為である。このような、移動による環境の見えの変化により主体がその見えを呈する物理的存在の存在を認識するという行為は(9)と同質の認識行為である。しかし、(9)での移動が主体の身体移動であったのにたいし、(19)での移動は主体の意識であり、この移動を動機づけているのは、探索の結果、必ず探索対象が存在するという確信を起点、探索を経路、確信の実現認識を到達点とする〈予期スキーマ〉<sup>4)</sup>である。〈予期スキーマ〉の作用による存在認識であることを「あった」のタ形が反映している。

(19) 真美は、もう一度、夫の携帯にかけた。呼び出しのベルが鳴っているところを捜せば見つかるのではないかとという気持ちからだ。懐中電灯の明かりが雲仙地獄の遊歩道にばらまかれた。それが動いていく。携帯のベルの音を頼りに追いかけていて、「あった！あったわ！」と、叫び、雪に濡れた携帯を拾い上げた。(『十津川警部』：15)

## 2.3 主観的解釈

表現の意味は、原則として、いつもそこに述べられている事態を理解し解釈する概念主体と合体しているのであり、当該の表現が主観的表現であるか、客観的表現であるかの問題は、概念主体と概念化されるものとの関係にある。両者が最も非対称の関係をみせるのは、オンステージの状況を認識する際に、概念主体が全く自己を喪失した形でその認識のなかに埋め込まれる場合と、概念主体には関係なく、概念客体が明白で、それ自体しっかり輪郭づけられており、正確に理解される場合である。前者が主観的事態解釈であり、後者が客観的事態解釈である。両者の関係は、もちろん程度の問題である。しかし、この関係は、主体、客体の役割がしっかりと区別されていようとも、または多少曖昧であろうとも、どんな概念化にも表れているものである。この基本的な関係を表したものが図1である。

対象の存在認識を表す言語表現「ある」「いる」では、「ある」「いる」を文末とする当該の文表現自体に言語主体が現れることはない。しかし、2.1, 2.2で見たように「ある」「いる」が表す対象存在の確定認識は言語主体の知覚<sup>5)</sup>、もしくは心的遠隔パースペクティブに拠るものであり、このことから、言語表現それ自体には表立って現れ出ない言語主体の存在を参照点として想定しないかぎり「ある」「いる」を文末とする当該の文表現は成立しないと

## 存在表現「ある」「いる」の意味

いえる。姿を見せない言語主体がそこでは確固として存在している。この構図は、まさに上記の「オンステージの状況を認識する際に、概念主体が全く自己を喪失した形でその認識のなかに埋め込まれる」と説明される最も主観的事態解釈の構図であり、したがって、それを反映する言語表現「ある」「いる」は極めて〈主観的な言語表現〉ということができる。

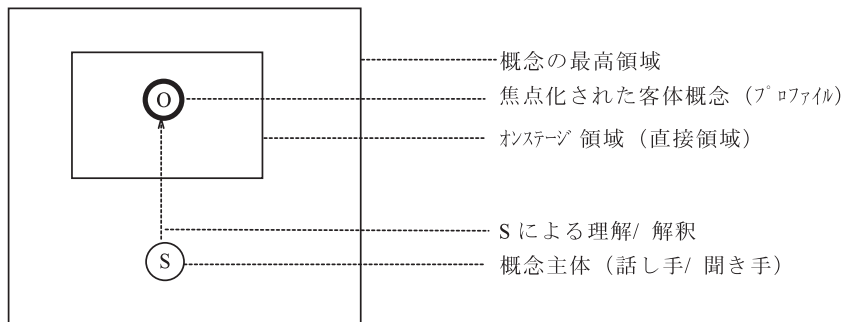


図1 Langacker (2002)

### 3. 動性認識

言語主体の主観的事態把握態度を反映する「ある」「いる」は、その差異に言語主体の如何なる認識態度を反映しているのだろうか。言語主体のイメージ把握の観点から「ある」「いる」の意味の差異を考える。

#### 3.1 無情、有情の問題点

従来、「ある」「いる」の異同については、「ある」は〈無情〉のものの存在、「いる」は〈有情〉のものの存在を表す表現とされるのが一般である。〈有情〉のものの代表としては、人と動物が挙げられる。しかし、このような〈無情〉〈有情〉の識別という説明は、次の二点で説明力があるとはいえない。まず、言葉の意味が不明瞭であることが挙げられる。『広辞苑』第五版（岩波書店、1998）では、次のように記述されている。

「無情」①なさけ心のないこと。情愛のないこと。「一の雨」

②心のないこと。木や石などにいう。非情。「一の草木」

「有情」①心のあること。情のあること。うじょう。

②生物の感覚・感情を具えていること。

しかしながら、この説明は次に示すようにいくつかの点から明確さに欠けると言わざるを得

ない。「無情」の説明にある①と②では「心」ということばが用いられているがこれらは同一のものを指示しているのだろうか。木や石に心がないという場合の心と、なまけ心がないということとは同じとはいえないだろう。さらにいえば、果たして「心」とは何か、ということになる。また、このような「心」の定義の不明瞭さが「有情」の①と②にも見られる。①では、「心」は「情」と同一視されているようだが、②では「生物の感覚・感情」が「心」のようである。どうもすっきりしない説明である。次に、本論の冒頭で見た観察例との関わりからいえることであるが、もしもこのように、存在対象の「無情」「有情」が「ある」「いる」のはたらしきの違いの根拠となるのであれば、人が「ある」で表されたり、無生物が「いる」でも表されたりする言語現象はどのように説明されるのだろうか。

とはいえ、権威のある辞書にも書かれていることから、「無情」「有情」の説明は日本語を母語とする多くの者を納得したつもりにさせるものであり、母語話者のなんらかの直感に合致するのだろうと推測される。一般に、母語話者がもつ母語にたいする直感はその場合的を射ているものである。そのため、「無情」「有情」の説明も上記説明ではいまひとつ明確さに欠けるとはいうものの、母語話者の直感に合致するという点において尊重すべき要因のように思われる。そこで、本章では、最終のところでは「無情」「有情」との対照を試みることを目論みつつも、まずは「無情」「有情」の観念から一旦離れ、事態解釈の観点から「ある」「いる」の差異を探ってみたい。

### 3.2 イメージスキーマ

外部世界の対象を認識する場合、われわれは具体的な経験に培われたイメージを介してその対象を把握している。外部世界の対象に対するわれわれの認知能力は、具体的なイメージだけでなく、このイメージにかかわる経験の積み重ねによって形成されたさまざまなイメージスキーマによって支えられている。イメージスキーマとは、具体的で、豊かなイメージや心的画像とは異なり、イメージのいわば抽象的構造として機能する力動的パターンである。われわれの日常を形作るさまざまな経験はこのイメージスキーマの働きに動機づけられて互いに結びつけられているのである。この力動的パターンであるイメージスキーマが「ある」「いる」の形式と意味を結びつける認知のメカニズムを説明することを、ここでは説明する。

「人間」を対象とした「ある」「いる」の振る舞いを手がかりにして考えてみよう。「人間」を対象とした存在表現が「ある」でも「いる」でも表されることは、(1)(2)(3)で観察したとおりである。とはいえ、「人」に「いる」が選ばれることが圧倒的に多いことは多くの言語資料が示すところであり、日常の言語生活のなかでも誰もが容易に理解できることだろう。しかし、「人間」について述べる場合であっても(20)にあるように、「屍体」とのコンビネーションとなると「ある」が選ばれるのが普通である。つまり、「人間」についてその存在を認識

## 存在表現「ある」「いる」の意味

する場合でも「屍体」では「ある」、「人」では「いる」が選択されるのである。この差異は、われわれが持つ「屍体」のイメージと、「人」のイメージの差異を反映していることを意味するものであり、「ある」が〈死んでいること〉のイメージの存在、「いる」が〈生きていること〉のイメージの存在を認識する態度を反映しているといえる。

(20) 私は侍女のようなマリア像を横目で見ながら、内陣の横の扉を排して外に出た。そこは海に臨んだ芝生で、また一つの屍体があった。

そこで、〈生きていること〉と対峙したイメージとしての〈死んでいること〉のイメージと、常に「ある」を要求する対象である、例えば〈本〉や〈家〉との共通イメージを考えることによって「ある」のイメージスキーマを抽出したいと思う。〈生きていること〉のイメージを背景にして考えてみると、〈死んでいること〉と〈本〉との共通イメージですぐに気づくことは〈主体的動きの無〉にあるといえるだろう。したがって言語主体は、存在対象にたいして〈主体的動きの無〉を認識すると「ある」で表し、〈主体的動きの有〉を認識すると「いる」で表すといえそうである。これを〔仮説〕とする。

〔仮説〕 「ある」：存在対象に〈主体的動きの無〉を認識

「いる」：存在対象に〈主体的動きの有〉を認識

この仮説は日常の「ある」「いる」の振る舞いの多くを説明する。しかしながら、「ある」には生きている「人」をも対象とすることは(5)に挙げたとおりである。

(5) けれども幸いにして人類はかくの如き稟資の人ばかりからは成り立っていない。そこにはもっと愛の純真な表現を可能ならしめようとする人がある。そうしないではいけない人がある。

われわれは日常の経験から、生きている「人」には主体的動きがあることを知っている。そのため、生きている「人」が対象である(5)からは〔仮説1〕「ある」の〈主体的動きの無〉は成立しないことになる。にもかかわらず、「人」が「ある」で表現される場合があるのはなぜだろうか。(7)を見てみよう。

(7) 「とても静かですね」と僕は言った。「今の時間は誰もいないのよ」とレイコさんは言った。「私はとくべつ扱いだから今こうして自由にしているけれど、普通の人みんなそれぞれのカリキュラムに従って行動してるの。運動している人もいるし、庭の手入れをしている人も

いるし、グループで療法している人もいるし、外に出て山菜を集めている人たちもいるし。そういうのは自分で決めてカリキュラム作るわけ。(略)」

(7)では、「人」の存在が具体的時空に位置づけられている。「僕」と「レイコ」さんの今、ココという時空である。われわれの日常がそうであるように、具体的時空に位置づけられた「人」のイメージが生き活きたものであり、〈動き〉が前景化して認識されることは誰にも納得のいくことだろう。これにたいし、(5)での「人」の存在は、その前の文にある「人類は」といった表現が示すように、観念世界に位置づけられている。観念世界でのイメージは、「人」がそこに存在していることは確かでありながら、その存在はいわば抽象概念としての存在である。「人」に動きがあることは知識として承知しながらも、認識主体が無意識の意識のうえで〈動き〉を前景化することはない。つまり、「人」ということばが反映する概念は〈動き〉という要因を備え持っているのだが、この要因が前景化されるか否かは言語主体の事態把握態度に準じるわけである。また、「ある」を必ず要求する〈本〉や〈家〉などのような存在を対象とする存在認識では、〈動き〉という要因は内包されていないと主体は認識しているのである。このような二通りの「ある」が表出する「ある」の概念構造は、タイプとインスタンス構造<sup>6)</sup>で説明される(図2)。

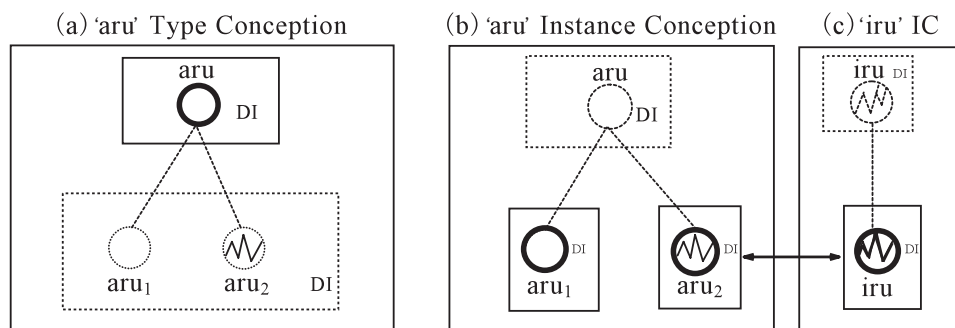


図2

図2では上から下へと概念構造が階層を成している。破線は上位概念と下位概念が同一のスキーマ(円によって示される「存在」スキーマ)から成ることを示す。(a)(b)にある太線の円が「ある」のタイプを表す。上位概念である〈単純に「存在」を意味する〉スキーマをタイプとし、この上位概念が状況によって(b)の太線の円によって示される $aru_1$ もしくは $aru_2$ のインスタンスとなって現れ出る。 $aru_1$ と $aru_2$ の相違は〈動き〉を内包するか否かにあり、円内の折れ線が内包されている〈動き〉を表し、 $aru_2$ では〈動き〉が内包されている。

一方、(c)が示す「いる」の概念構造においては、上位概念も下位概念も同一構造スキーマ



マであり〈動き〉を内包した存在の認識を表わし、内包されている〈動き〉はどのような状況においても前景化される。このような〈動き〉の内包は (b)  $aru_2$  とイメージを共有するものであり、(b) と (c) の異なりは〈動き〉の前景化と背景化にある。〈動き〉が前景化されれば「いる」という言語表現が、前景化されなければ「ある」という言語表現が表出することとなるのである。

### 3.3 「ある」「いる」の意味

事態把握の観点から考えると「ある」「いる」の意味は、ともに主体の〈主観的な存在認識態度〉を表すものであることがいえる。両者の意味の差異は、主体が対象に主体的な動きを認識するか否かを反映するものである。「いる」は対象の主体的な動きを認識する主体の認識態度を反映し、「ある」は対象の主体的な動きを認識しないとする主体の認識態度を反映する。

このような事態把握態度は主体の主観的なものであることから、同じ対象の存在を認識したとしても、対象の主体的動きを認識するか否かによって選ばれる形式は異なる。例えば、キティのぬいぐるみについて話す場合、「あっ、キティちゃんがいる！」と言う子どもがいる一方、「よしこちゃんの家に行ったらキティちゃんがいっぱいあったよ」と言う子どももいる、といった、同一の対象の存在認識が「いる」と「ある」の両方で表される。このような発話は日常の言語生活で実に頻繁に耳にするものであり、〈動性〉の有は共感を喚起し、一方〈動性〉の無は、共感を喚起しないことの効果として、対象に客観性を帯びさせる。しかし、こういった共感喚起や客観性の付与は、「ある」「いる」が発せられた場がもたらす効果であり、「ある」「いる」が備える本質の意味は図2で説明したスキーマを反映するものである。

最後に3.1で挙げた辞書の説明との関係について述べておこう。辞書に述べられている説明は、主体の心的態度を明示する「ある」「いる」を、あくまでも〈対象についての側面〉から説明しようとしたものである。〈無情〉〈有情〉というように「情」という日本文化を絡めた難解なことばや、「心」というつかみどころのない説明は、辞書の読み手に対象の動きの有無についてのなんらかを感じさせることを企図したものだといえるかもしれない。

### おわりに

言葉の伝統的な研究では、意味とはなによりも文がそなえる何かである、と仮定している。しかし、私の立場は「言語主体にとって言葉が意味を持つというのはどういうことか」という問いに答えを出すことである。本論では「ある」「いる」の意味の本質を言語主体の事態



把握の観点から探求した。本論で述べた私の考えは発話主体と事態との関係に限定してあるが、今後は、さらに、生態学的視点から共同注視の概念を取り入れることにより間主観性へと拡げていきたいと考えている。また、本論では、言語形式として「ある」「いる」のみ取り上げたが、日本語の存在表現には「存在する」という表現もある。これら三者の関係についても今後の課題としたい。

## 注

- 1) 従来の研究では、小説のことはと日常のことはことばのはたらきが乖離している、とする説が根強い。しかし、言語主体を基軸としたことばのはたらきを探求する本論では、両者にはなんら相違はないという立場をとる。そのため、日常の実際の使用データとして小説の文章を用いる。
- 2) データでの頻度は極めて低い。
- 3) 山梨(1995: 128-132) 参照
- 4) 山本(1997) 参照
- 5) 大森荘蔵(1994: 132) に次のような指摘がある。「しかしそれが知覚の状況である限り、存在は知覚そのものである。机の姿が見えたりそれに触れるとき、その見え姿や触感の中にはその事物の存在が籠もっているのではないか。その見え姿とは存在しているのが見える姿であり、その触覚とは存在している物としての触覚ではないか。存在するとは、その事物がそこにかく見え各触れることと切り離された何か別の抽象的観念ではない。かく見えかく触れるそのことがまさに存在なのである。このように、知覚の場では知覚されることの中にその存在が籠められている。」
- 6) Langacker(2008: 268) 参照

## 引用例文出典

- 有島武郎『惜しみなく愛は奪う』岩波書店、1954  
大岡昇平『野火』新潮文庫、1954  
西村京太郎『十津川警部「告発」』新潮文庫、2006  
松本清張『張り込み』新潮文庫、1965  
——『点と線』新潮文庫、1971  
——『ゼロの焦点』新潮文庫、1971  
向田邦子『思い出トラップ』新潮文庫、1986  
村上春樹『ノルウェイの森(上)』講談社文庫、2004  
村上春樹『海辺のカフカ(下)』新潮文庫、2006  
小学館『サライ』5月号、2007

## 参考文献

- 池上嘉彦 2000 『日本語論への招待』 講談社
- 大森荘蔵 1994 『時間と存在』 青土社
- 金水敏 2006 『日本語存在表現の歴史』 ひつじ書房
- 工藤真由美 2000 『否定の表現『時・否定と取り立て』 岩波書店
- 寺村秀雄 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
- 中村雄一郎 1975 『感性の覚醒』 岩波書店
- 本多啓 2005 『アフォーダンスの認知意味論』 東京大出版会
- 松永澄夫 1993 『知覚する私・理解する私』 勁草書房
- 三尾砂 2003 『三尾砂集Ⅰ』 ひつじ書房
- 山口明穂 2004 『日本語の論理』 大修館書店
- 山下秀雄 1979 『日本のことばとところ』 講談社
- 山梨正明 1995 『認知文法論』 ひつじ書房
- 2000 『認知言語学原理』 くろしお出版
- 2009 『認知構文論』 大修館書店
- 山本雅子 1997 「こんなところにあった」 『言語科学論集』 第3号, 京都大学総合人間学部基礎科学科情報科学講座
- Langacker Ronald W. 2002. Concept, Image, and Symbol
- 2008. Cognitive Grammar. Oxford University Press
- 『広辞苑』 第五版 岩波書店